

# 論文内容の要約

放送大学大学院文化科学研究科  
文化科学専攻人間科学プログラム  
2021年度入学  
(学生番号) 211-700078-8

ふりがな                      もりだいら                      じゅんじ  
(氏名)                          森平                          准次

## 1. 論文題目

心理療法における他者の経験と否定のはたらきを捉える視座

## 2. 論文要約

### 序論

まず、本研究のリサーチ・クエスチョンを提示し、目的を示した。心理療法は、セラピストという他者との間でクライアントが心理学的に変容していく過程である。そして他者とのかかわりにおいては、他者が自己ならざる存在であるという契機にもみられるように、否定というはたらきが前提されている。本研究では、心理療法において他者の経験と否定のはたらきがクライアントを変容させる機序を検討するための視座を開くことを目的とした。このような問題意識から、心理療法の事例研究を行うこととする。

本研究は心理療法における他者の経験と否定のはたらきの意義について考える地平を開くものであり、心理療法の実践における新たな視座を構築していくことに寄与し、理論と実践のいずれにも貢献するものである。

### 第1章 心理療法における自己と他者のかかわりと経験

第1節では他者の経験についての論考を整理した。M. Merleau-Ponty, 木村敏(1972/2001)の「人と人との間」、西田幾多郎のいう純粹経験(1911/2020)、和辻哲郎, E. Lévinas, の議論を取り上げ、その概要を整理し、他者の経験における自他未分化で融合的な経験を視座に据えた。これらの論考をもとに、現象学的な視座から自他の生起する機序について検討し、自他未分化な現象から否定の契機によって自と他が分化し生起していくという動きや、他者の絶対的な他という在りようについて概観した。

第2節では、生起した自他の、そこにおいて立ち上がる独立した存在としての自己の在りようを発達的な観点から捉えた。自己が自己として独立した存在

であるには身体という契機が重要な意味をもっていることを、Merleau-Ponty や市川浩の論考から確認した。そのうえで、M. S. Mahler ら(1975)の分離個体化理論を取り上げ、発達にともなって養育者から独立した行動がとられていく過程について確認した。

第3節では、心理療法における他者の経験として、転移やスキーマの概念を取り上げ、他者が帯びる様相について検討した。認知行動療法の文脈から発展したスキーマ療法では、対人認知のスキーマを他者の経験の基底として考える。また精神分析では、転移がその理論の重要な柱である。転移は、発達上の重要な他者のイメージを心理療法家に映し出してみるといって S. Freud が想定した概念から発展し、M. Klein や T. H. Ogden はセラピストとクライアントの関係性の中で生起するものとして考え、自他未分化な経験が視座に含まれている。C. G. Jung の分析心理学ではより根源的で原初的な元型的イメージの生成を視座に含んでおり、セラピストとクライアントの無意識を含めた人格的なかわりによる変容が錬金術をモチーフに論考されている。

これらの議論を基に第4節で、心理療法における他者の経験についてまとめ、クライアントが表象として経験する転移の位相から、セラピストとクライアントの未分化で融合的な経験の位相までを視座に捉えた。

## 第2章 心理療法における否定

第1節では、否定のはたらきについて3つの位相から整理した。まず、「否定的なもの」として立ち現れる、表象に対する判断としての否定を概観した。次に、かかわらないことや切断すること、差別や排除、暴力、といった行為そのものに内在している否定を論点とした。さらに、分節化によって存在そのものが立ち現れる契機である否定のような、存在の本質としての否定について、Hegel の視座を取り上げた。これにより本研究で否定を捉える視座として、判断としての否定、行為としての否定、存在の本質としての否定、の3つの位相が確認された。

第2節では、心理療法がかかわる否定の諸相を概観した。まず、クライアントが心理療法に来談する端緒となる症状等の現れを、クライアントにとっての否定的なものや状況として振り返った。次に、精神分析が提起した防衛機制の概念等から、症状を維持する機序を否定のはたらきとして確認した。さらに、セラピストとクライアントのかかわりに見られる否定として、中断等をまとめた。また、分析心理学の概念であるアニムスを否定という動きのイメージとして捉える研究を確認した。これにより、心理療法がかかわる否定として、心理療法の開始にかかわるクライアントにとっての否定、症状を維持する否定、セラピストとクライアントの間にかかわる否定、現実感とその対象化や分節化にかかわる否定、の4つの側面が浮かび上がった。

第3節では、変容するというところにそれまでの在りようを否定するという契

機が含まれていることを確認した。まず、第 1 項でイニシエーションについての視座を確認し、それまでの自己の在りようが一度否定され、新たな存在として再生されることや、構造として外から解体される自己を見つめる契機が含まれるという指摘(河合, 2000)を確認した。次に第 2 項で、否定的な症状や状況によって心理療法を受療することを、変容への端緒として捉えた。さらに第 3 項で、認知行動療法や深層心理学的心理療法における心理療法的かかわりや行為を否定の視座から捉えた。認知や行動を検討することは、クライアントのその時点での在りようを否定することになり、またそれを検討するという否定の契機が生起する。精神分析の流れからは、「主体は、自分自身を創造的に否定するプロセスを通じて、常にそうなっていくものなのである」(Ogden, 1994/1996, p.99)という主張もされている。分析心理学では、否定が主体の生成とかかわる論考がなされており、それについて事例研究から主張されてもいる。これらを概観することを通して、心理療法においては変容が否定をとおして生起することを確認した。第 4 項においては、上記の議論を踏まえたうえで、肯定的な変化を前提としての否定では否定が十分に立ち現れてこないこと、それゆえ「否定の否定」を視座に含めるべきことを検討した。

### 第 3 章 本研究における他者論・否定論の概念の整理と事例研究の目的と方法

第 3 章第 1 節と第 2 節ではそれぞれ、第 1 章と第 2 章の議論を総括し、本研究における他者の経験と否定のはたらきについての視座を確認した。本章においては、これまでの議論から他者の経験と否定のはたらきを捉える視座を、それぞれ 2 次元の軸として示し、そこにクライアントの語りから捉えられる他者の経験と否定のはたらきを位置づけられる図を作成した。他者の経験については「否定と肯定」「分離と融合」という二つの軸を想定した。否定のはたらきについては「自己と他者」「表象と経験」という二つの軸を想定した。それにより心理療法過程の時間の経過に伴って、他者の経験と否定のはたらきがどのような位相をたどっていくか、見ることを可能にした。

第 3 章第 3 節では、第 4 章から第 7 章で取り上げる事例研究について、その目的と方法を説明した。事例研究では、筆者の心理療法の自験例を取り上げ、それぞれに見られた他者の経験と否定のはたらきを抽出した。本研究の事例研究では、分析のツールとして大谷尚(2008)の開発した SCAT(the Steps for Coding and Theorization)を用いた。SCAT は、収得した言語データをセグメント化し、「<1>データの中の着目すべき語句、<2>それを言いかえるためのデータ外の語句、<3>それを説明するための語句、<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念、の順にコードを考えて付して」「<4>のテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し、そこから理論を記述する手続きからなる分析手法」である(大谷, 2019, p.271.)。本研究のようにリサーチ・クエンションを明確に設定した研

究で、心理学的な事象について概念化を行い、より純粋な形で検討できる方法である。また、事例においてクライアントとのかかわりが抽象化されるため、クライアントの個人情報を守るうえでも有用である。その一方、SCATを用いて概念化することにより、事例研究で豊かに検討することのできる事例の様々な側面が捨象されることになる。オーソドックスな臨床心理学における事例研究では様々なエピソードから象徴的で多義的な意味合いを論考することができるのであるが、SCATで概念化することにより事例の多義的な意味合いが零れ落ちてしまう。それを補うため、取り上げる事例についてはSCATによる分析を行う前に事例の概要を簡単に記述し、またその事例における特徴的なエピソードを取り上げた。それにより、他者の経験と否定のはたらきという視座から零れ落ちてしまう事例の生き生きとした心理学的動きや変容の契機についてみていこうとした。

#### 第4章 主体性を生起させる否定

第4章で取り上げた事例を事例Aとした。クライアントに、他者の視点に映る否定的なものとしての自己、という心理学的テーマが見出された。心理療法の過程において、自己が徹底的に否定されるという幻聴様の経験、そしてそのような徹底的な否定の中に在って自己に対する支持的・肯定的なコミット、といった契機が語られた。クライアントは心理療法終結のころ、否定の経験を潜り抜けることによって生起した主体性と、それによる身体感覚や感情体験への気づき、を語った。

#### 第5章 セラピストとの間で経験された否定による自己の感覚の涵養

第5章で取り上げた事例を事例Bとした。クライアントには、自己の存在の基盤が脆弱であり、他者との間に没入することができない、という心理学的テーマが見出された。自他の間に没入することへの否定は、自己の内界へのコミットに対する否定と連動していた。心理療法はクライアントの内的な在りようが表出しやすく、クライアントにとって危機的なものとして経験されうる。心理面接でクライアントは、対象の非分節化や身体的な揺れ、めまいや視界の不明瞭化を経験し、セラピストもそれらを経験した。筆者はこれをセラピストとクライアントの間への没入であり、自他の未分化で融合的な経験の現われであると考察した。このときこの経験を対象化し言語化する否定によって、対象の再分節化や自己の存在の安定化が生起した。没入とその否定はクライアントの自己の存在感を強化し、自他の間や自己の内界へのより自由なコミットが可能となった。

#### 第6章 認知と行動の検討に機能する否定

第6章で取り上げた事例を事例Cとする。クライアントには、他者への否定という心理学的テーマが見いだされた。クライアントは自己の周囲の他者を否

定的なものとして経験していたが、その他者は特定化されず、個別の具体的な他者の相をとらず一般化されていた。心理療法ではセラピストがクライアントの認知や行動を検討することを促した。これはクライアント自身が否定の対象となり、自己が他から分節化され、またクライアントが他者を分節化していく経験となり、分節化する主体としての在りようを生起させた。この過程を経て、クライアントは適応的な感覚を得て、主体的な生き方への志向性が生起した。

## 第7章 かかわりから撤退するという否定

第7章で取り上げた事例を事例Dとする。ひきこもりを呈するクライアントに、境界を創り他者とのかかわりから閉じこもるという否定と、それによって自らが安心して存在できる世界を創造する、という心理学的テーマを見出した。また、クライアントの軽度の自己臭恐怖症状や他者への暴力性を否定として捉えた。暴力は表現することを否定されたが、明瞭に他に向かう否定の感情をクライアントに認識させた。クライアントは暴力的な在りようを自己の表象に認め、否定的なものとしての自己に直面した。また、面接において沈黙するという対話の否定を経験し、それを通して、自他未分化な雰囲気のような存在感に触れる契機となった。クライアントはこれらの否定を通じて自己にコミットし、それにより主体的な生き方を模索できるようになった。

## 第8章 総合的考察

本論の最後に第8章として、第4章から第7章で考察した事例から抽出した他者の経験と否定のはたらきについて並置し、俯瞰し、対比しつつ検討した。

各事例の心理療法過程は、他者の経験に否定のはたらきがみられること、否定のはたらきによって他者の経験がより深まることを示唆していた。他者の経験と否定のはたらきは、それぞれがお互いの契機をはらんでいるといえる。否定は表象、間に入ることを否定する心理学的動き、暴力的な感情、分節化する契機、境界を創る契機、と様々な位相で経験される。クライアントは、これらの否定のはたらきをそれぞれに様々な位相で経験していた。その際、否定する対象は、自己にとっての他者、他者にとっての自己、自己の在りよう、と事例によって個性的であった。また否定する主体も、自我がみている他者、自己が内在する世界、自我、と事例によって異なっていた。

各事例におけるクライアントの他者の経験と否定のはたらきをそれぞれ、第3章で作成した2次元の軸に、心理療法の展開という時間軸に添ってプロットした。それによって時間的な変容の動きを理解することができた。またそれぞれの事例を並置して、それぞれの経験の位相の差異を捉えた。これらの作業を通して、心理療法が弁証法的に展開する中で、他者の経験と否定のはたらきの契機がそのうちに含まれていることをみることもできた。あるいは、他者の経験と否定のはたらきが、心理療法を弁証法的に展開させているということもできる。

転移についても、心理療法においてセラピストとクライアントがともに在るとき、自他未分化な位相においてなにかしらの雰囲気や直接的な感情体験といった経験があり、否定の契機により自他が分化したのちにその経験を対象化して捉えるという機序が見いだされる。転移はその自他未分化な相での経験を、過去の重要な他者との間で経験したものに似た経験として捉えたり、自己にとって好ましいものや不快なものとして捉え返したりしたものであるといえる。

これまでの議論をもとにし、心理療法において生起する他者の経験と否定のはたらきを概念図として示し、包括的に捉えた。この概念図ではクライアントとセラピストとの間に、自他未分化な融合的な場が想定されている。そこをセラピストとクライアントがそれぞれに独立した存在として分化されていったり、融合的な化学反応が生起したりする場として描いている。そこは自他が生起する根源的な場である。次に本図においては、クライアントによるセラピストの表象の否定や、セラピストとかかわることや関係に没入することの否定も描かれる。クライアントの日常生活における他者の否定や他者に否定される経験も心理療法のなかで語られ、それを通してクライアントの日常生活における他者の経験や否定に変容がみられることも概念図に示される。セラピストの、クライアントの認知や行動の検討というクライアントのその時点での存在の在りようを否定する契機や、クライアントの経験やセラピスト自身の経験について言語化・対象化する否定の契機も捉えており、心理療法のなかでセラピストの行為が否定としてはたらいていくことが描かれる。この弁証法的な動きのなかで、クライアントの自己の分節化や主体性が生起し、新たな自己の在りようが開かれる。ここでいうクライアントの自己はそれまでの自己イメージである。心理療法においてセラピストという他者を経験し、否定のはたらきを通して自己イメージが分節化されていくが、この時クライアントは自らの自己イメージにコミットしている。それにより、コミットする主体として、また自己イメージを分節化する主体としての在りようが生起してくる。主体としての自己の在りようは新たなクライアントの自己イメージであり、それからの生きる在りようにつながる自己である。

セラピストとクライアントがかかわるとき、そこにはたがいに否定の契機を孕んだ存在としてともに在る。そこには、分かり合えなさやかかわれなさといった否定の状態も想定される。また、ともにクライアントの在りようについて検討するとき、そこにはその時点でのクライアントの在りようを否定するという契機が含まれる。経験を対象化し、言語化しようとする営みは、否定の契機によっている。このように根源的には、心理療法においてセラピストは、存在として否定を孕むものとしてクライアントに対峙する。そしてその場においては、常にセラピストとクライアントは自他が融合する未分化な在りようと、そこから否定のはたらきにより自他として生起していく契機を経験している。独立した存在として立ち現れたセラピストはクライアントにとってなにかしらの

様相を帯び、セラピストとクライアントは連動しながら心の変容を経験していくが、そこには常に否定の契機が含まれている。セラピストという他者との間で否定を経験していくことを通して、クライアントは存在としての否定を孕んだものとして主体的な在りようを開かれていく。それはクライアントが個性化した存在として未来に開かれていく生成である。

心理療法は、これらの否定のはたらきを内包しつつ、セラピストという他者がクライアントにかかわるなかで心理学的に営まれる過程であるといえる。

結論

第1節では、本研究の概要を振り返った。本研究の構成を確認し、概要につ

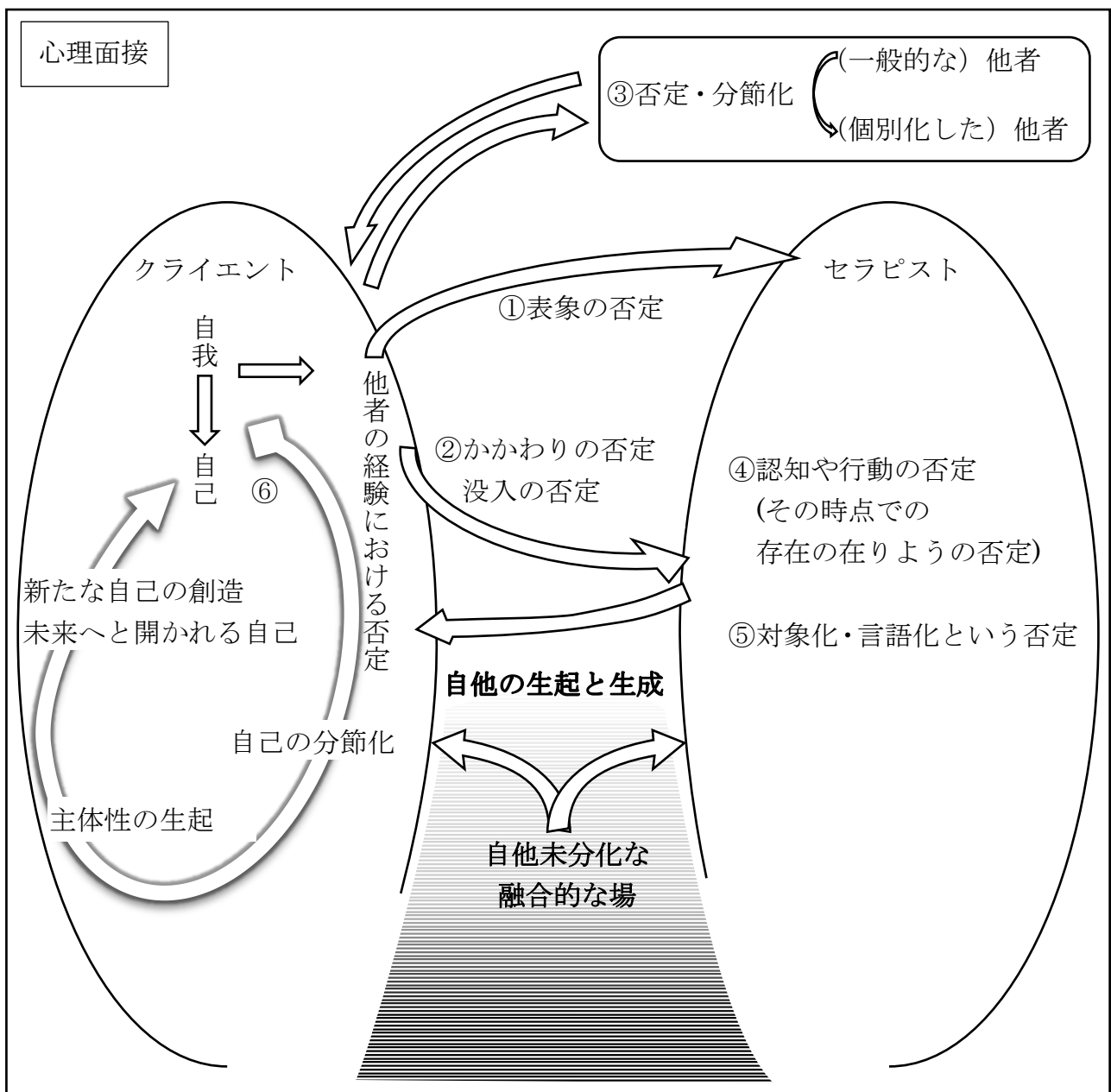


図 心理療法における他者の経験と否定のはたらきの概念図

いてまとめた。そして第2節では、本研究の成果と臨床心理学への寄与について叙述した。

本研究の総合的な成果として、心理療法における他者の経験と否定のはたらきについての多様な次元や位相を包括的に示し、それらを捉える視座を開いたことを挙げる。心理療法においてクライアントが経験する他者や、心理療法においてみられる否定のはたらきについて、それぞれ2次元の軸を想定することで、クライアントの心理学的現象を捉えることを可能にした。さらに、心理療法における他者の経験と否定のはたらきを包括的に捉える概念図を作成して視覚化し、視座を示した。

本研究のオリジナリティとしては、心理療法においてクライアントの他者の経験の根源的な自他の生起の契機を射程に捉えようとした点、また他者の経験と否定のはたらきとを関連させて論じたことにあるといえる。実際の心理療法の実践の中で、他者の経験と否定のはたらきとを見通そうとする視座を示し、事例を通してそのダイナミズムを描き、心理療法の一つの視座を開いたことは本研究での一つの成果であると考えられる。さらにその検討を、一事例ではなく複数の事例を提示し、並置し俯瞰し、それぞれの特徴を抽出して対比させたことも、本研究の独自性であり成果である。これまで、様々な事例研究で個別に示されていた他者の経験や否定のはたらきの相互連関について、複数事例の比較検討を通して、位相ごとの差異と、位相を超えた共通の構造を捉えることを可能にしたことは、本研究の意義である。

第3節では、本研究の限界と今後の課題を示した。限界として、他者論や否定論の広大な範囲で、本研究において扱うことのできた先行研究が限られてしまっている点と、一つの理論体系からの掘り下げが不足している点、を挙げる。さらに自験例は思春期から青年期にかけての事例で、一定以上の面接への動機と経験を言語化する能力、自我機能としても一定以上の強さをもっていた。したがって、異なる発達段階や、深い病態のクライアントに、本研究で得られた視座からどのように理解ができるかについては、検討の余地がある。これらについては、今後の課題としたい。

#### 文献

- 河合俊雄(2000). イニシエーションにおける没入と否定. 河合隼雄編, 心理療法 1 心理療法とイニシエーション, 岩波書店, pp.19-59.
- 木村敏(1972/2001) 人と人との間. 木村敏著作集 3 躁鬱病と文化/ポスト・フェストゥム論. 弘文堂, pp.165-319.
- Mahler, M.S., Pine, F., & Bergman, A. (1975). The psychological birth of the human infant: symbiosis and individuation. Basic Books. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀訳(1981). 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化. 黎明書房.
- 西田幾多郎(1911/2020). 善の研究. 小林敏明編. 西田幾多郎 近代日本思想選.



筑摩書房, pp.9-101.

Ogden, T.H. (1994). *Subjects of analysis*. Jason Aronson. 和田秀樹訳(1996).

「あいだ」の空間—精神分析の第三主体— 新評論.

大谷尚(2008). 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 —着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学), 54, 27-44.

大谷尚(2019). 質的研究の考え方 研究方法論から SCAT による分析まで 名古屋大学出版会.